

Title	坂口昂吉著 『中世の人間観と歴史：フランシスコ・ヨアキム・ボナヴェントゥラ』
Sub Title	
Author	神崎, 忠昭(Kanzaki, Tadaaki)
Publisher	三田史学会
Publication year	2000
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.69, No.3/4 (2000. 5) ,p.303(635)- 308(640)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20000500-0303">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20000500-0303</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

坂口昂吉著

『中世の人間観と歴史』

—フランススコ・ヨアキム・ボナヴェントウラ—

神崎 忠昭

本書は坂口昂吉氏（慶應義塾大学名誉教授・帝京平成大学教授）の四〇年以上にわたる研究の成果の一部を選び、まとめたものである。既に本書<sup>①</sup>については様々な分野の専門家によって多くの書評<sup>②</sup>が書かれており、さらなる書評は屋上屋を重ねるとの感を否めない。また評者は著者の弟子であり、書評を行なうのは僭越の誇りを免れ得ないであろう。しかし、著者の警咳に長年接してきた者が評することも、何らかの意味があるかと思ひ、敢えて筆を執るものである。

本書の全体の構成および内容を理解する一助として、以下にその章立てを示すこととする。

序論

I 中世における人間観の発展—アウグスティヌスからフランススコへ

II 中世における歴史観の発展—アウグティヌスの終末論からヨアキムの新しい歴史神学へ

第一章 フランススコ会の創立をめぐって

第二章 アシジのフランススコと宗教運動

第三章 アシジのフランススコとカタリ派

第四章 フランススコ会の教团组织について

第五章 フランススコ会における党派対立の原因について

第六章 ボナヴェントウラとアリストテレス哲学の關係

第一節 若き日のボナヴェントウラとアリストテレ

ス哲学の關係

第二節 晩年のボナヴェントウラとアリストテレス  
哲学の關係

第七章 ボナヴェントウラのフランシスコ伝について

第八章 ヨアキムの歴史神学とスコラ学者トマスと

ボナヴェントウラ

第九章 ボナヴェントウラとフィオレのヨアキム

第十章 ボナヴェントウラの歴史神学におけるキリス

トの位置

以上の章立てからも察せるように、本書は新たに書き下ろされた部分である「序論」と、過去四〇年間に書かれた論文一篇を編んでつくられた「本論」からなり、「本論」は、アシジのフランシスコとフランシスコ会を論じる第一章から第五章までの前半部と、ボナヴェントウラとフィオレのヨアキムを論じる後半部に大別される。序論が「I 中世における人間観の発展—アウグスティヌスからフランシスコへ」と「II 中世における歴史観の発展—アウグスティヌスの終末論からヨアキムの新しい歴史神学へ」とに別れ、二つにして一つであるように、本書は「人間観の発展」と「歴史観の発展」を相互

に連関して発展したものと捉えようとしている。

そして「近代世界の世界観の基盤をなす」「人間の尊厳と歴史の進歩の肯定」は「中世キリスト教世界の中に宗教的源泉を持ち」、「中世一千年にわたる過程の間に徐々に実現し、漸く十三世紀をもってその全貌を現わした」ことを明らかにすることを目的としている。その論の中心となるのは、表題にも示されているように、「キリストの人間性に対する深い崇敬」の模範を示したアシジのフランシスコ(一一八一—八二—一二二六)と、「未来に來るべき靈的修道者の世界を待望する宗教的進歩史観」を展開したフィオレのヨアキム(一一三五頃—一二〇二)、そしてこの二つを総合したボナヴェントウラ(一二二七頃—七四)である。彼らの思索や影響を通じて、「近代思想の原型が宗教に包まれ支えられた形で完成」する過程を本書は明らかにしようとしているのである。<sup>(3)</sup>

なお、各章の内容についての詳細な紹介は、他の書評との重複を避けるべく、本稿では行なわない。関心のある方は直接本書にあたり、あるいは註(2)に挙げた書評、特に甚野尚志氏と矢内義顕氏によるものを参照されたい。さて以下は、身近にいる者としての、「感想」の次元

を超えてはいないかもしれない「書評」である。

本書を読んで評者が何よりも感じたことは、当たり前前  
のことではあるが、本書の中に坂口昂吉という著者その  
ものが存在しているということである。

まず第一に、信仰者としての著者そのものが本書には  
存在している。本書は著者の「信仰告白」とも言えるで  
あろう。著者は青年期に洗礼を受けてから、約五〇年に  
わたる敬虔なカトリック信者である。数年前に評者は、  
東京目白の聖マリア大聖堂でのラテン語ミサにおいて著  
者が聖体拝領をするのを実見したことがあるが、その様  
は、本書第二章で示されているアシジのフランシスコの  
聖体に対する崇敬をどこか髣髴とさせるものであった。

著者の信仰心が、本書を貫く背骨となつていたのである。  
しかし、本書が「信仰告白」であるとすることは、著  
者が護教的な目的のために史実を歪曲していると評者が  
考えているということではない。著者は丹念に、なおか  
つ大量に史料を読まれる。大学院の演習などでのラテン  
語講読の速度と量に、評者は若い頃辟易したものである。  
しかも、辞書をよく引かれる。著者のラテン語の辞書は、  
どれもポロポロである。聞くところでは、どれもが数冊  
目であるという。また著者所有の研究書にもポロポロの

ものが多い。それらは古典的な著作が中心であるが、  
「韋編三絶」の世界である。正確な読解と把握を求めて  
おられるのである。

また著者が慶應義塾での教育において、そして本書に  
結実する研究において、繰り返しとりあげ、熱心に読ま  
れてきたものには、プロテスタント系の研究者、例えば  
ポール・サバティエ、エルンスト・トレルチ、ヘルベル  
ト・グルントマンたちの研究書が多く見られる。カト  
リックに必ずしも偏しているわけではない。むしろプロ  
テスタント系研究者の影響の方が強いかもしれない。双  
方の成果を批判的に消化吸収されて、自らの体系に組み  
込まれていったのであろう。

著者が、「キリスト教についての正確な知識をできる  
だけ広い範囲の人々に知ってもらうことが自分の使命で  
あると考えている」と繰り返しおっしゃったのが、評者  
の印象には深く残っている。著者の信仰、そしてそれか  
ら発する使命感がなければ、本書は成立し得なかつたで  
あろう。学問と信仰、そして人生の、うらやましいばか  
りの一致が本書には見られるのである。

さらに、ここには歴史家としての著者そのものが存在  
している。本書が対象とするのは我が国ではあまり研究

されてこなかった分野である。一方で当時の神学、哲学について全体的な、そして細部にわたる理解が必要である。他方でそれらを取りまく政治、社会や心性の実態と変化に目を配らなければならぬ。これは絶えざる精励努力なくしては実現され得ないものであるが、それと同時に錯綜する全体に対する明確な立脚点が必要である。そうでなければ、複雑怪奇で晦い荒海に難破してしまうであろうから。著者が、本書の対象に対して、何よりも歴史家として臨んでおられることは明らかである。

「哲学史研究は対象を *philosophia perennis* として扱ってはならない」と筆者がおっしゃられるのを評者は何度も聞いたことがある。この *philosophia perennis* とは、「不変の哲学」とでも訳せるであろうか。いかなるように訳するにせよ、それをとりまく環境や諸要素を等閑にして、閉じられた系として過去の哲学あるいは神学などの思想を研究してはならないという誠めを示されたのである。これは哲学者というよりも、やはり歴史家ならではの視座であろう。そのような態度が、本書にはよく表われているのである。

このような研究姿勢は、だが一朝一夕になつたものではなく、四〇年以上にわたる研究生活において次第に培

われていったものであろうと評者は考える。本書に収録された諸論攷の初出年<sup>(4)</sup>、あるいは『史学』第六六卷三号に掲載されている「坂口昂吉先生略歴・主要著作目録」を見てみると、スコラ学、特にボナヴェントゥラが著者の研究の出発点であったことがよくわかる。もともと理念的関心が強かつたのであろう。さきほど挙げたトレルチなどを好む読書傾向も、このような著者の性向を反映している。しかし慶應義塾という実学への傾きが強い大学にあつて、また西洋史学という実証が求められる環境にあつて、社会環境や政治経済などの現実に対する関心を喚起されて、歴史学的な思想研究の道を拓かれていったのであろう。本書には、そのような思想研究と歴史学の幸福な結婚が見られるのである。

著者の有するこれらの信仰者としての、歴史家としてのバランス感覚は、著者のある論考の表題に倣つて表現するならば「*discreto* (分別)」と呼べよう<sup>(5)</sup>が、本書にはよく表われている。個々の結論はオーソドックスで、目新しいものではない。だが、全体を通してみれば、本書は我が国ではユニークなのである。

先日、著者の慶應義塾における最後の講義を聴く機会があつたが、それも著者でなくてはできないようなオリ

ジナルなものであった。ボナヴェントウラやスコトゥスの「個別化の原理」をとりあげて「個」の出現を論じ、それを「ルネサンス」と絡めていくというものであった。だが、その講義を聴いて評者が痛感したことは、本書『中世の人間観と歴史—フランシスコ・ヨアキム・ボナヴェントウラ—』が未完成であるということである。本書には著者が長年にわたってとりくみ、温めてこられた問題に対して、完結したかたちで、著者の回答が充分には示されていないと評者は考えるのである。

評者にとつてより興味深い「人間の尊厳」観だけをとりあげても、本書で論じられているのは、フランシスコとボナヴェントウラが中心であり、それ以外についてはあまり触れられていない。これについては坂口ふみ氏、甚野尚志氏や矢内義顕氏が既に指摘されていることではあるが、キリスト教に内在する人間観の本質や、先行する諸要素、例えばアンセルムスに代表されるような一二世紀の人間観についてはあまり言及されていない。またフランシスコとボナヴェントウラ以降の人間観の變化についても触れられてはいない。これはたいへん不満なことである。

もつとも、これは著者ご自身が感じられている不満で

もあろう。本書の「まえがき」や「序論」を読めばよくわかることである。ここで筆者はルネサンス期におけるピコ・デラ・ミランダの人間観に至る発展過程を仄めかされているからである。また、前述の講義において盛期スコラ学における人間観が論じられていたことも、著者の現在の関心のあり方を証明していよう。

本書は、過去の論攷を選んで編集し、序論を付したものであるというその成立事情からして、過不足があるということとは仕方ないことであろう。しかし、評者としては、キリスト教的ヨーロッパ中世が生み出した「人間の尊厳」という問題について、また「歴史の進歩の肯定」という問題について、著者がさらなる回答を公けにされることを望むものである。これは単なる期待ではない。余人にはなしがたい著者の義務であると、評者は考えるものである。

（創文社 一九九九年二月一五日刊 A5判 xiv 十二  
八二十六頁 六三〇〇円）

註

（1）著者の略歴およびこれまでの研究業績については、『史学』第六六卷三号に掲載されている「坂口昂吉先生略歴・主要著作目録」を参照されたい。

- (2) これまで(二〇〇〇年一月の時点)に発表された書評を順にその評者の専門とともに記すと、神学史の矢内義顕氏「『中世の人間観と歴史—フランシスコ・ヨアキム・ボナヴェントゥラ』坂口昂吉著」(『キリスト新聞』一九九九年五月八日)、政治思想史の柴田平三郎氏「もう一つの中世思想史」(『デジタル月刊百科』一九九九年七月号)日立デジタル平凡社 一九九九年七月)、神学史の坂口ふみ氏「『明暗の交錯—坂口昂吉『中世の人間観と歴史』を読んで—』」(『創文』四一一号)創文社 一九九九年七月) (二二二—二六頁)、教会思想史の甚野尚志氏「坂口昂吉著『中世の人間観と歴史—フランシスコ・ヨアキム・ボナヴェントゥラ—』」(『史学雑誌』第一〇八編第一〇号) 史学会 一九九九年一〇月) (一〇七—一二三頁)、再度の矢内義顕氏「坂口昂吉著『中世の人間観と歴史—フランシスコ・ヨアキム・ボナヴェントゥラ—』」(『宗教研究』第七三卷第三輯) 日本宗教学会 一九九九年二月) (一八八—一九二頁)がある。
- (3) 括弧で括られた引用は、本書の「まえがき」からのものである。
- (4) 本書一八二頁参照。
- (5) 「聖ベネディクトス会則における Discretio の理念」、『中世研究』(上智大学中世思想研究所紀要) 一(一九八二) (これは上智大学中世思想研究所編『聖ベネディクトゥスと修道院文化』創文社 一九九八年)に再録されている)。
- (6) 註(2)参照。